

称号及び氏名	博士(看護学) 中納 美智保
学位授与の日付	平成28年3月31日
論文名	看護実践の経験の意味づけからみたキャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成プロセス
論文審査委員	主査 町浦 美智子 副査 篠持 知恵子 副査 志田 京子 副査 青山 ヒフミ

論文内容の要旨

【目的】

新卒看護師を含めキャリア初期看護師の離職が問題となっており、キャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成もしくは発達の問題視されている(加藤, 1997; 鶴田, 2002)。本研究の目的は、看護実践の経験の意味づけからみたキャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成プロセスを説明する理論を構築することである。理論を構築することで、キャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成を促進するような教育的支援について検討でき、離職予防につなげることも期待できると考える。

【用語の定義】

①看護実践の意味づけ: 看護実践での患者や家族との関わりにおいて看護師が把握、解釈、理解すること、②キャリア初期看護師: Schein (1978) のキャリア発達段階の研究から看護経験5年以下の看護師、③職業的アイデンティティ: Fagermoen (1997) の定義より看護師であることの意味や看護師として働くことの意味といった観念に関連し、看護師の看護観を象徴するものであり、看護師の思考、行動および患者との相互作用を導く看護師の価値と信念、と定義した。

【方法】

本研究は、Strauss & Corbin (2008) のグランデッド・セオリー・アプローチを用いた。

1. データ収集は、キャリア初期看護師を対象に平成24年2月から平成27年1月にインタビューガイドを用いて半構成的面接法を実施した。インタビュー内容は、①今までの臨床経験の中で印象に残っている患者との関わりの経験やその時の感情、②その経験はどのような意味があったか、③その経験が看護にどう影響し、その後の看護にどのような変化があった

か、などを中心にデータ収集段階に応じて生成された概念や仮説に関する問いなどを追加した。データ収集と分析は同時並行で行い、3段階を経て進めた。2. データ分析方法は、オープンコーディング、軸足コーディング、選択的コーディングを通じてカテゴリーを抽出し、カテゴリー間の関係によって現象を把握し、概念と仮説の生成段階、経験年数別の比較分析の段階、施設別の継続比較分析と理論的飽和の確認段階を経て理論を生成した。また、分析過程では結果の適合性と真実性の確認のためにメンバーチェックおよびスーパーバイズを受けた。構築した理論はキャリア初期看護師の教育に携わっているキャリア中期看護師と看護管理者から納得できる内容であるとその適切性が確認された。3. 倫理的配慮：本研究は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認（申請番号 23-51；25-2）を得て実施した。

【結果】

1. 研究協力者はキャリア初期看護師 20 名であり、経験年数は 2 年目 3 名、3 年目 6 名、4 年目 6 名、5 年目 5 名であった。看護実践の経験は計 47 事例が語られ、内訳は 1 年目 13 例、2 年目 12 例、3 年目 14 例、4 年目 6 例、5 年目 2 例であった。2. 看護実践の経験の意味づけからみたキャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成プロセスは、【実践と内省の反復による専門職としての視野の広がりと深まり】というコアカテゴリーで説明できた。このプロセスは、【患者の役に立つための手段の模索と適性への迷い】 【患者への意識の高まりと職業継続への迷い】 【患者や家族への思いを重視しながら自己の役割の模索と看護師としての成長への実感のなさ】 【専門職として看護師の使命を自覚し、自分なりの看護の追求】 という 4 つのステップを経ていた。ステップ 1 では、患者や家族から感謝された経験から【患者や家族との会話が大切なことが分かった】 【未熟な自分でも役立てた】 という意味づけから【患者や家族と会話することを心がける】という職業的アイデンティティにつながっていた。ステップ 2 では、患者との関わりの中で患者への【関わりを意識することで看護が変わることが分かった】という意味づけから【一人ひとりの患者を重視して関わる】という職業的アイデンティティが抽出された。また、ステップ 1・2 では患者の厳しい言葉や態度から【看護師として働くことが不安になる】 【患者に何もできなかった】という意味づけから、【看護師に向いていないかもしれない】 【看護師としてやっつけられるのか】という適性を案ずるアイデンティティも抽出された。ステップ 3 では、ターミナル患者や家族との関わりの中で【看取りの看護の難しさに直面した】という意味づけから【ターミナル患者や家族に自分ができることを考える】という職業的アイデンティティにつなげ、ステップ 4 では、患者から「あなたに会えてよかった」と言われた経験から、【看護師としての自信が出てきた】という意味づけをし、【専門職として患者の心に残る看護師になる】という職業的アイデンティティが見出された。

【考察】

看護実践の経験の意味づけからみたキャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成プロセスの特徴は、看護実践の経験を意味づけすることを繰り返し行うことで意味づけの

視点が自分の状況から患者、家族、自分なりの看護へと変化し、職業的アイデンティティが4段階を経て形成されることであった。ステップ1では、患者や家族からの肯定的反応から関わり方の方策になる職業的アイデンティティにつなげていた。ステップ2では、意味づけの視点が自分の状況から患者へと変化して職業的アイデンティティにつなげていた。ステップ3では、患者との関わりの中で捉えた患者の思いを重視し、自分ができることを探しながら関わろうとする職業的アイデンティティに変化し、ステップ4では、専門職としての自覚をもって自分なりの看護を追求するという職業的アイデンティティに変化していた。しかし、ステップ1・2・3では、患者の厳しい言葉や態度をきっかけに看護師として自信を失うような意味づけもみられ、離職につながる可能性が危惧された。

教育的支援としてはキャリア初期看護を指導する看護師が日々の看護実践をキャリア初期看護師と共に振り返り、意味づけの重要性に気づき、意味づけを促すような関わりが職業的アイデンティティの形成につながり、離職予防に役立つ可能性が示唆された。本研究は一般病棟に勤務しているキャリア初期看護師のみを対象としたため、結果の一般化は難しい。今後は対象をさまざまな環境で勤務するキャリア初期看護師に拡大し、理論を洗練させていく必要がある。

キーワード：看護実践の経験の意味づけ、キャリア初期看護師、
職業的アイデンティティ

学位論文審査結果の要旨

本研究は看護経験5年以下のキャリア初期看護師を対象に、グランデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach; 以下GTA）を用いて、看護経験の意味づけからみた職業的アイデンティティの形成プロセスを明らかにすることを目的とした。約3年にわたるデータ収集と分析において、2施設から20名の研究協力者を得て、生成された概念や仮説をもとに経験年数別、施設別に継続比較法を用いてカテゴリーを抽出したことは、GTAに基づく的確な方法を用いていると評価できる。

キャリア初期看護師の看護実践の経験の意味づけから見た職業的アイデンティティの形成プロセスは【実践と内省の深まりによる専門職としての視野の広がりや深まり】というコアカテゴリーで説明でき、4つのステップから成り立っていた。4つのステップを特徴づけるカテゴリーは、[患者の役に立つための手段の模索と適性への迷い] [患者への意識の高まりと職業継続への迷い] [患者や家族への思いを重視しながらの自己の役割の模索と看護師としての成長への実感のなさ] [専門職としての看護師の使命を自覚し、自分なりの看護の追求]であった。ステップの移行には意味づけの視点が自分の状況から患者・家族へ、そして患者や家族の思い、さらに専門職と自分なりの看護を意識するというように広がりや深まりがみられた。その意味づけには患者や家族の言葉・評価や信頼関係、「できたという実感」が影響していることが明らかになった。

これらの結果は限られたキャリア初期看護師20名が看護実践の経験からどのような意味づけをして、それが職業的アイデンティティの形成にどうつながるのか、現実的なプロセスを明らかにした点で新規性のある研究である。特に看護経験3年目までは離職率も高いと言われている中で、臨床判断モデルやパターンが看護実践の意味づけとも関連することを考察し、職業的アイデンティティを見いだせるような教育的支援への示唆が得られたことは意義深いと考える。今後これらの結果に基づき、臨床指導者や看護管理者により看護実践の経験の意味づけを重視した関わりを通して、キャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成を促す教育的支援を期待したい。

本論文は文献検討、分析方法、結果は丁寧に記述されており、考察において一部課題が残されたが、大変優れた論文である。よって、看護管理学における実践・研究の発展に資する価値を有しており、博士（看護学）の学位の授与に値するものと判断した。